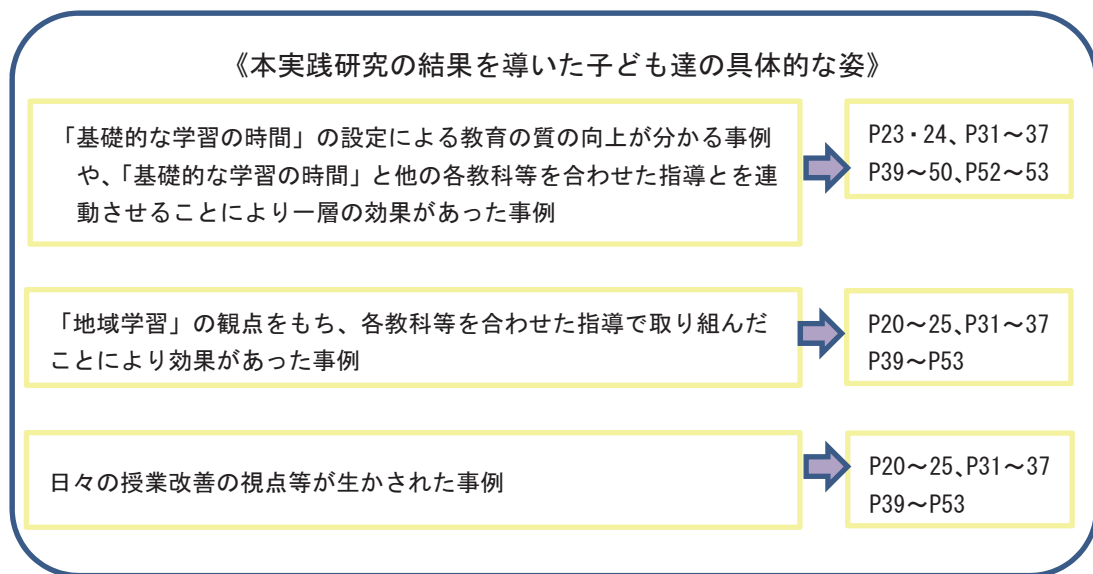


2 成果及び今後に向けて

この2年間の試行は、少々駆け足ではありましたが、後述のような子ども達の様々な姿から、研究仮説が検証できたのではないかと捉えています。また、具体的・実際の授業の中で、子ども達それぞれが何らかの役割をもち、役立ち感や貢献することの喜びを感じる、これがまた次の意欲につながり、自ら生活の質を向上させる力をはぐくむ、この観点を大事にした授業は、まさにキャリア発達を促すものでもあると考えています。

子ども達がつけてきた力を、私達だけではなく保護者や地域の方々、進路先事業所の方々とともに確認できたことも、非常にうれしいことでした。



成果及び今後に向けて、以下のように整理しました。

(1) 成果

ア 「基礎的な学習の時間」の設定による教育の質の向上、及び「基礎的な学習の時間」と他の各教科等を合わせた指導とを連動させることによる一層の効果

「基礎的な学習の時間」を設定し、基礎的・基本的な学力やコミュニケーション力への充実に向けた学習を進めたことにより、分かること・できることが増え、分かることの喜びやできることへの自信、自分なりの工夫とそれによる学習への意欲等の姿が多くの子供達に見られました。さらに「基礎的な学習の時間」の内容等を、他の各教科等を合わせた指導で取り組む内容等と同時期に連動させると、学校や家庭でも学んだことが発揮できる、あるいは生活全般の変化につながるといった姿も確認することができました。

子ども達にとっては、その時期その時期に必要な具体的・実際の活動を、時間を

かけて丁寧に継続的に、あるいは別の場面でも取り組むこととなります。そういったことの積み重ねにより、学びが定着し、分かる・できる自信と学習や生活の意欲にもつながっていくのだと考えます。

本時間の設定と、同時に他の活動とを連動させるという取り組み方は、子ども達の意欲や主体的に活動する力を一層はぐくむということが分かりました。

ただし他の学習との連動については、例えば計算学習と買い物学習のように直接的・短期的に成果が表れることばかりではありません。つながりが明確に見えにくい場合や即時に効果が表れない場合もあります。こういったことについては、今の取組が学習や生活の土台となり、将来に確かにつながっていくことを私達がしっかりと意識しておくことが大事です。

「基礎的な学習の時間」の設定により、私達教員にも変化が見られました。個々の児童生徒のある力に焦点を絞ることにより、今までよりもていねいに実態を把握したり、目標や内容等を見直す機会となっています。また、生活全般の土台となる基礎的・基本的な力について考え直したり、他の授業や生活の中で出てきた課題を「基礎的な学習の時間」で取り組んでみる、できつつあることを他の場面でも取り組んでみるなど、一層の工夫を試みる姿が見られています。



イ 「地域学習」の観点を持ち、各教科等を合わせた指導で取り組む教育効果、及び「つけておきたい力」と関連させた指導内容の整理

学校で学んだことが、家庭や地域で実際に生かすことができたり、自信をもって地域の方々と接していこうとするなど様々な子ども達の姿から、各教科等の内容を具体的・実地的な各教科等を合わせた指導の形態で学習すること、しかも「地域学習」の観点をもって授業をつくっていくことは、子ども達の生きる力をはぐくみ、将来の生活の質を自ら向上させるために効果的であることが分かりました。

また、子ども達が地域で生き生きと生活していく力をはぐくむための、今と将来、学校と家庭や地域につながる教育課程について、「つけておきたい力」と関連させた指導内容で整理することができました。

この「観点マトリクス（試案）」は今後、日々の実践がどのようにつながっているのかを具体的にイメージしていく手がかりとなります。授業目標と評価の明確化、個々の子



ども達の将来の姿と短期目標の更なる具体化が期待できます。また、保護者との連携にも役立てることができます。教育活動の説明のみならず、いつの時期にどんな力を付けていくのか、だからこそ今こんな力をこのように付けていこうと、将来の具体的な姿を描きながら、学校と家庭とが協働して取り組むための有効なツールともなります。

ウ 日々の授業改善研究をとおして

各学部で年間をとおして行ってきた授業改善研究により、以下のことが確認できました。

《小学部》 まず安心できる基盤となる環境づくり（人との関係の安心やすることが分かる見通しの安心）、その上で子ども達が期待感をもち、意欲的に取り組める設定や、指導者や友達を意識できる設定の工夫。

《中学部》 目に見える工夫によってすることが分かり順序が分かること、分かることは主体的な活動を導くこと。役割を明確化する、それは個々の子ども達の実態や興味関心に応じたものであること。

《高等部》 特に作業学習においては、個々に応じた十分な作業量の準備、分業による活動のシンプル化による生徒一人一人の役割の自覚と責任意識の向上。指示がなくても主体的・意欲的に取り組める姿をめざした授業づくり、製品制作自体ではなく相手（お客様）や地域を意識することがさらに活動意欲を向上させること。

また、全校研究会において、各学部の実践を全校教員で共有したことは、12年間のつながりを意識した授業づくりへと生かされていきます。することが分かるだけではなく、何のためにしているのかその意味が分かること、見通しがもてること、役割として分かること、そこから自身の工夫や意欲そして主体的な行動が生まれること、子ども達にとって必要なことはいつでもどこでも取り組んでいく等を確認することができました。

エ 地域に貢献できる学校の在り方の確認

本校は、宇治市から福祉避難所として指定を受けています。今年度、本校の避難訓練を、福祉避難所としての訓練も併せて計画したところ、御高齢の方も含め30名もの地域の方々に協力していただけ、宇治市からは避難時のワンタッチパーティーを12基お借りして実施することができました。

高等部生徒と地域の方々とが小グループを組んで、パーティー内で防災給食の試食会、さながら疑似家族です。「おつゆの具は多いほうがよいですか?」「いや、ちょっとでええわ。」高等部の生徒が臨機応変に対応しています。日々の学習がまさに生かされた瞬間です。避難訓練なので、もちろ



ん事前の練習はありません。将来、実際に避難を余儀なくされた場合にも、支援を受ける側だけではなく、彼らが率先して、過ごしやすい避難所生活を地域の方々とともにつくることができればと、期待は膨らみます。

学校こそが地域に貢献できること、地元で宇治支援学校があって良かった、と思われる学校づくりを具体的な形で進めていくことの大切さを学ぶことができました。

なお、これまでに述べてきた成果は、「地域学習支援担当」や「人材育成・研修部」等々本校の特徴的な学校組織が有効に機能してこそその成果でもあります。学校組織の在り方とその機能的な動きが、教育実践を支えるための重要な基盤となっていることを改めて実感することができました。

(2) 今後に向けて

ア 「基礎的な学習の時間」の目標・内容・方法等の吟味及び他の取組との連動の在り方による質の向上

「基礎的な学習の時間」の実践は、まだまだ試行錯誤の段階です。具体的・実際的となる内容や方法、あるいは課題による学年内グループ編成の工夫等、個々の子どもの目標と照らし合わせながら、授業の質を向上させていかねばなりません。他の学習活動との効果的な連動の在り方についても検討していく必要があります。特に、肢体不自由を併せ有する重度重複の子ども達にとっての在り方については、授業改善とともに引き続き検討しつつ進めていきます。

また、「基礎的な学習の時間」ワーキングチームが取りまとめた作成した目標と内容の一覧表は、現在の実践を抽出したものであり、指導すべきすべての内容を網羅したものではありません。実践の手がかりとなる資料としていくためには、一覧表を充実させていく必要があります。

イ 「観点マトリクス（試案）」と「一覧表（試案）」の有効性の確認

観点マトリクスと一覧表が、すべての子ども達に、すべての授業に有効であるか、実践を通じて検証しながら、今後数年間をかけて表を充実させていきます。また、授業評価や個々の児童生徒の評価の在り方についても検討を進めます。

ウ 家庭との一層の連携と協働

家庭や地域で見せる子どもの姿と保護者の願いをていねいに把握しながら、「観点マトリクス（試案）」も活用し、家族の一員としての役割を担いつつ成長できるよう、協働した取組をさらに進めます。

エ 宇治支援学校の「地域学習」の深化

地域の方々に障害のある子ども達を知ってもらい、あるいは協力いただくという関

係だけではなく、子ども達にどんな力を付けてほしいのか、どのように育てているのかの共有とともに、取組が地域ニーズと本当に合致しているかの吟味も含め、協働の質を向上させたいと考えます。子ども達の力が家庭や地域で生かせるよう、宇治支援学校の「地域学習」をさらに展開します。



また、交流及び共同学習についても、地域の学校との連携協力のもと進めます。

オ 学校組織を生かした授業改善の取組及び府内の特別支援教育の拠点校としての発信
高等部の作業学習の在り方について検討を重ねています。すべての子ども達の希望
進路の実現のため、働く意欲を育てる質の高い授業を追求しなければなりません。

また、大量退職、大量採用が今後数年続く中、早期の人材育成は急務となっています。すべての教員がじっくり学び合える実践研究を組織的計画的に実施し、本校の特徴的な学校組織を生かしながら、より良い授業づくりをめざしていきます。

これらを進めていくためには、本人、保護者、地域、卒業生や進路先事業所などからの評価を得、日々の授業へフィードバックさせていくことも引き続き必要です。

本校は、本府の特別支援教育の拠点校でもあります。こういった取組により得られた成果は、他の府立の特別支援学校に向け、機能的な学校組織の在り方とも併せて発信していきます。また、京都府内の小中学校の多くの特別支援学級において、各教科等を合わせた指導の実践が行われていますが、特別支援学校の教育を参考にしている率は高くないとの報告もあります。発達障害を含む障害のある幼児児童生徒への教育的支援を進めるセンター的機能としても、「生きる力」をどのようにはぐくむのか、本校の発信が求められるところだと考えます。

